

今年のカンヌ国際映画祭は5月13日から24日まで開催されるそうですが、参加作品に関するレビューも配信されてきました。その中で5月17日付で配信されたサウス・チャイナ・モーニング・ポストのクラレンス・ツイの早川千絵監督作品『ルノワール』評を拙訳でお伝えします。”PLAN75’ CHIE HAYAKAWA CONSIDERS AMORALITY IN JAPAN”というタイトルです。

（以下訳文）

父親の死を目の当たりにしながら、芸術に共感を求める少女の物語は、1980年代の日本における「食欲さは善」というメッセージを私たちに伝えているかのようです。『ルノワール』を見て涙を流す観客はほとんどいないのではないかと。不気味なほどに穏やかな登場人物たちは、死にゆく人物を篤く介護したり、死者を悼んだり、あるいは生氣のない結婚生活に苦痛を感じることでさえ、涙を流すことはほとんどない。

早川千絵の二作目の長編作品は、国策で国家の若返りを目的とした高齢者の安楽死プログラムを推奨するというデビュー作『PLAN75』のようなディストピア映画とは異なる。1980年代の日本を舞台に、父親が癌で入院している少女の生活を描いた『ルノワール』は、社会の中で非常に現実的で道徳的なジレンマに悩まされる少女の通過儀礼を感情的に描いた作品ではなかろうか。さらに重要なのは、早川が歪んだ社会規範に対して微妙ではあるが的確な批判を行なった点であり、この歪んだ社会規範は『PLAN75』で実現化した独自の非人間的な社会規範に通じるものがある。

カンヌ国際映画祭のコンペティション部門でプレミア上映された『ルノワール』は早川の堅実な脚本としっかりした演出によって、さらに物語性が強化され、登場人物の冷淡さと夏の雑然とした日本家屋を表現した暖かい色調との対照が見事に表現されている。早川がキャストたちから素晴らしい演技を引き出すことに成功している。本作の主演の鈴木唯で、11歳の他人の痛みをきちんと理解できない少女フキを繊細な感覚で好演する。彼女は泣き叫ぶ幼児の映像をほとんど微動だにせず見守り、原爆の生存者の証言をスナック菓子をむしゃむしゃ食べながら聞くような子なのだ。また、彼女はテレパシーに魅了されていて、癌の末期症状の父親圭司（リリー・フランキー）に対する関心よりもまざっている。早川は脚本の中で、この少女が着実に自分なりのやり方ではあるものの、他の人たちとのつながりを求めていることを明らかにする。現実の人間が彼女を失望させてしまうのであれば、彼女はむしろ超自然・動物・芸樹の中に同類の精神を探し出すとすることだろう。特にフランスの印象派を代表する画家ピエール・オーギュスト・ルノワールの作品に。

だが、この少女はこの時代の非常に独自性を表す部分を具えていることも示されている。フキの母詩子（石田ひかり）は、出来るだけ感傷的にならないやり方で、間近に迫った夫の葬儀の準備をしながら「将来のことについて考えている」と公言する。こうしたプラグマティズムは、偽の癌治療薬を売るペテン師、不安定な心情の中年女性を騙すハンサムな男、近所で暴れ回る自動的虐待者など周囲に悪影響を及ぼす反社会的行動に反映される。こうした登場人物の穏和な外見の裏側には根底を流れる不道徳性があり、早川はそれを1980年代の日本のバブル経済を生み出した「食欲さは善」という精神と微妙に結びつけている。早川は本作において、過去の時代を物語っているが、彼女の描いた多くの問題を抱えた過去は、実際には過去のものではないことを観客に伝えているのかもしれない。